大分合同新聞

ワークシート　　年　　組　名前

佐伯市の狩生地区自主防災会は、津波避難地にある地区の防災倉庫で、
地区住民個人の備蓄物資を預かって保管しています。

2020年5月19日付大分合同新聞14面

定期的に備蓄品の入れ替えをする住民＝佐伯市狩生

倉庫に個人の備蓄品

災害時、重い荷物持たず避難

【佐伯】佐伯市の狩生地区自主防災会（近藤洋三会長）は、津波避難地にある地区の防災倉庫で、地区住民個人の備蓄物資を預かって保管している。事前に重い荷物を運び込むことで、災害時のスムーズな避難につなげるのが狙い。「足腰が弱い高齢者も安全に逃げられる。ほかの地域でも参考にしてほしい」と説明する。

佐伯・狩生地区

狩生地区は佐伯湾に面し、南海トラフ巨大地震でJR狩生駅を含めて地区が広く浸水すると想定されている。低地では5～10㍍浸水する恐れもあり、高台にある聴松庵（海抜20㍍）と妙見社（同18㍍）の避難地2カ所に地区の防災倉庫を整備している。

2カ所の倉庫には投光器や発電機といった地区の備蓄品を配備し、空きスペースに各世帯が自由に備蓄品を入れることができる段ボール箱を一つずつ準備。現在、2カ所の倉庫を計80世帯が活用し、各自で必要となる水や食料、予備の毛布などを備えている。

段ボール箱一つ分　水、食料など保管

取り組みを始めた2014年以降、年に3回、防災訓練などに合わせて倉庫を開放。住民らは賞味期限が迫った食料品などを更新している。3日に聴松庵でペットボトルの水などを詰め替えた入江経子さん(74)は「家から持って出るのが大変な重い物を段ボール箱に詰めている。自宅に準備している非常用持ち出し袋の中は、薬や貴重品など軽い物だけ。すぐに逃げることができるので安心」と話した。

14年に自主防災会長をしていた戸高弘行さん(81)は「住民の半数が高齢者。体が不自由な人も多いので、防災倉庫を活用することにした。各自が家族構成に応じて必要な物資をそろえることができ、自宅外で被災しても倉庫まで逃げれば自分たちの備蓄品を使うことが可能」とメリットを強調する。

大分大減災・復興デザイン教育研究センター（大分市）の小林祐司センター長は「自助と共助をミックスしたようなユニークな取り組み。人口が多い都市部では難しいだろうが、小規模な地区では参考になる活動ではないか」と評価した。

（乙咩啓太郎）

① 防災会が個人の備蓄物資を預かり、保管しているのはなぜでしょう？

②狩生地区には海抜20㍍と18㍍の高台の2カ所に避難地があり、地区の防災倉庫を整備しています。それは何のためですか？

③防災倉庫に住民が預けている物資にはどんな物がありますか？

④この取り組みによるメリットを二つ書いてください。